

Jews and Latvian of Riga in 1941 : On Latvian Collaboration in German-Occupied Riga (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27735

1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人

——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって——(後篇)

野 村 真 理

- I はじめに
- II 1941年7月のリーガ
- III リーガのユダヤ人

(以上、前号掲載)

- IV ポリシェヴィキはユダヤ人か
- V おわりに——いま何が問題か

IV ポリシェヴィキはユダヤ人か

カウフマンは、ドイツ軍がリーガを占領する前、「ペールコンクルスツは、すでにわれわれ[ユダヤ人]を絶滅する計画を練り上げ、敵[ドイツ]がそれに同意することを疑っていなかった¹⁾」と断言する。

ペールコンクルスツは、1934年に地下に潜り、1940/41年のソ連支配下で迫害をしぶとく生き延びた。その彼らに再び日の当たる場所を与えたのがナチだった。反ポリシェヴィキ・反ユダヤ・親ナチという思想的3要件を備えたペールコンクルスツの団員は、ナチが独ソ戦の前から現地協力者として目をつけていた者たちである²⁾。弾圧でドイツに亡命した団員は、独ソ戦が始まると、ドイツ軍とともに、あるいはラトヴィアのドイツ占領後、早々にラトヴィアにもどり、対ソ戦の協力者として、あるいは占領初期の反ユダヤ・プロパガンダとユダヤ人迫害で大きな役割を果たした。

かつてのリーダー、ツェルミンシュもその1人にほかならない。ツェルミンシュは、1934年にウルマニスによって逮捕され、1937年まで投獄された後、

ラトヴィアを去り、各地を転々として、独ソ戦前夜にドイツに落ち着く。そして1941年7月、ドイツ軍の特別将校としてラトヴィアに舞い戻った。また『テーヴィヤ』の発行人は、元軍人のエルネスツ・クレイシュマニスであるが、発刊当初の編集者は、ペールコンクルスツの団員でジャーナリストのアルトゥルス・クロデルスであった。

しかし、独ソ戦前のラトヴィアには、ついにリトアニアのLAF(リトアニア活動家フロントの略称)や東ガリツィアのOUN(ウクライナ民族主義者組織の略称)に匹敵する親ナチ反ソ抵抗組織は実現されなかった³⁾。リトアニアの当時の首都カウナスでは、LAFは独ソ戦が始まった6月22日のうちに武装蜂起して、ソ連軍との市街戦を制し、翌日、ドイツ軍が到着するより前、リトアニアの独立回復と暫定政府の誕生を告げた。この成り行きは、リトアニアの再独立を認める気のないドイツ側をあわてさせたが、ラトヴィアには、報告書でシュタールエッカーも述べるとおり、現地にそのように強力な「民族的指導者」はいなかった。カウフマンの眼にどのように写ったかという主観的問題は別として、7月1日のはじめからリーガのユダヤ人迫害を指導していたのはナチである。しかし、その指導の成果は、カウナスに比べ、シュタールエッカーにははなはだ不満が残るものだった。

独ソ戦開戦後、1941年10月15日までの状況を記した報告書で、シュタールエッカーは、カウナスについて次のように述べている。

「6月25日から26日にかけての夜の最初のポグロムのあいだに、1500人以上のユダヤ人がリトアニアのパルチザンによって殺害され、多くのシナゴークが、放火されるか、他の方法で破壊され、約60軒の家があったユダヤ人街は焼け落ちた⁴⁾。」

6月25日から27日にいたるカウナスの状況については、内容的に矛盾する複数の証言が残され、シュタールエッカーの記述は、すべてが史料によって裏付けられているわけではない。おそらく報告には、自身の策動の成功を誇りたいシュタールエッカーによる誇張がある。これに対して、同じ報告書でシュタールエッカーは、カウナスに比べ2倍弱のユダヤ人口を持つリーガについては、殺害されたユダヤ人の数を400人と記すのがやっとだった。

「ラトヴィアでは、[リトアニアと]同様の浄化行動とポグロムを始動させるのは、はるかに困難だった。その主たる原因は、特にリーガにおいて、民族的指導者のすべてがソ連に殺害されるか、拉致されてしまったことに求められる。確かにリーガにおいても、ラトヴィア人の補助警察に適切に働きかけることにより、ユダヤ人に対するポグロムを始動させることに成功し、その過程で全シナゴークが破壊され、約400人のユダヤ人が殺害された。しかし、リーガにおいては、住民は全般的にきわめて急速に落ち着きを取り戻し、それ以上のポグロムは不可能であった。

カウナスでもリーガでも、ユダヤ人と共産主義者の最初の自発的な粛清がリトアニア人とラトヴィア人によって執行されたことが³、可能なかぎり映画と写真によって記録された⁵⁾。」

リーガでは、街頭でラトヴィア人から暴行されるユダヤ人を写したプロパガンダ写真は残っているが、カウナスのリエトゥーキス協同組合の馬車置き場で発生したユダヤ人の集団撲殺のような、一般市民が見物するなかでのポグロムは、記録としては残されていない。この違いは、どこからくるのだろうか。

カウフマンら、ホロコースト生存者の回想を見れば、ペールコンクルスツなど、初期段階でナチの積極的協力者になった者たちの残虐さの質において、リトアニアとラトヴィアにそれほど大きな違いはなかった。決定的な違いは、街の「ポグロム気分」の濃度の差だったのではないだろうか。

実際、リトアニアと同様ラトヴィアでも、独ソ戦は異様な状況のなかで始まった。

第二次世界大戦が始まると、バルト3国はただちに中立を宣言するが、このとき3国の運命は、独ソ不可侵条約を結んだ2大国によって勝手に決定されていた。1939年10月5日、まず第1段階としてソ連は、ラトヴィアと相互援助条約を結び、ラトヴィア防衛の約束と引き替えにソ連軍の駐留を認めさせる。次いで今度は、ラトヴィアで駐留ソ連軍の安全が脅かされていると難癖をつけ、相互援助条約違反を口実に1940年6月16日、ラトヴィア政府の交代を要求、6月17日、ソ連の戦車隊をリーガに差し向け、6月21日、要求を実

現させた。ソ連の干渉は傀儡政権の樹立にとどまらず、操作された国会選挙で7月21日に共産党独裁体制を確立し、この国会の決議にもとづき、ついに8月5日、ラトヴィアはソ連に編入された。

独立の喪失、矢継ぎ早に進められた銀行、企業、土地等の国有化で、人々は混乱した。さらに、亡命の機を逸した旧ラトヴィア政府の高官や軍人の身柄の拘束にとどまらず、一般の、いわゆる反ソ分子の大量逮捕とソ連奥地の収容所への移送が開始されたのは、政変から1年後の1941年6月13日の深夜から14日の早朝にかけて、まさしく独ソ戦前夜のことだった。その規模は、ソ連側の文書によれば1万5000人以上にのぼったが⁶⁾、誰がどのような基準で選ばれているのかわからず、ラトヴィア市民を恐怖に陥れる。そして、この恐怖に終止符を打ったのが独ソ戦の始まりであり、侵略者ドイツ軍は、ソ連の恐怖支配からの解放者として迎えられることになった。

ソ連の恐怖支配とユダヤ人のかかわりについて、筆者のインタビューに答えてヴェステルマニス氏は、自身の記憶にもとづき、リーグで「ユダヤ人はチェーカー」と言われていたという。チェーカーとは、十月革命後の1917年12月20日に設立された「反革命・サボタージュ取り締まり全ロシア非常委員会」の略称で、1941年6月13/14日の逮捕と移送を取り仕切ったNKVD(内務人民委員部の略称)の前身にあたるソ連最初の政治警察である。ラトヴィアのNKVDの長はラトヴィア人、アルフォンス・ノヴィクスであったが⁷⁾、モスクワの意を受け、それを監督する立場にあったのは、ロシアのユダヤ人で国家保安人民委員部のセミオン・シュスティンであった。

「ユダヤ人はチェーカー」という言説、さらにチェーカーの上にシュスティンのようなユダヤ人がいるということ、これは、人々にソ連体制への転換を強く意識させる出来事であった⁷⁾。事情は、リトアニアも同様である。というのも、ロシア帝国の一部であったリトアニアやラトヴィアでは、1917年革命が起こるまで、ユダヤ人の役人や、ましてユダヤ人警察官の存在など、およそ考えられないことだったからである。両国が独立し、憲法によってユダヤ人の法的平等が実現された後も、公務員となって国家権力の末端に座るユダヤ人はまれだった。

これに対して、1940年の政変で旧体制のラトヴィア人公務員の多くが職場

を追われた後、ソ連が統治への協力を期待することができたのが、旧体制下で社会のエリートから排除されていた少数民族であるユダヤ人とロシア人だった⁸⁾。そのため、特にユダヤ教の伝統に背を向けたユダヤ人の若者には、性別や民族による差別を否定し、万民平等の原則に立脚してユダヤ人にもエリートへの道を開放した社会主義に対し、魅力を感じた者も少なくなかった。ヴェステルマニス氏は、ユダヤ人に対して特に深い恨みを抱く理由があったのは、ユダヤ人にポストを奪われたラトヴィア人の元警察官たちだったという。1941年7月1日、リーガの警察本部に集まった彼らがナチ協力者に組み込まれる構図が見えてくる。さらに、社会主義を否認する信心深いユダヤ人の場合でも、ヒトラーのドイツに対する防波堤になるのであれば、無神論者スターリンの支配は小悪だった。ユダヤ人が、1940年6月17日、リーガに入るソ連の戦車隊を歓声をもって迎えたと人々に信じられたゆえんである。

こうした背景があつてリヴォシュは、「ラトヴィア人は、ユダヤ人に向かつてソ連体制の復讐をしている⁹⁾」と述べるのであろう。しかし、にもかかわらず、ソ連支配時代のリーガで、実際にユダヤ人は、どの程度目立つ存在だったのだろうか。

両大戦間期のリトアニアで、首都カウナスのユダヤ人口は約3割を占める。カウナスをはじめとして、リトアニアの4大都市に占めるユダヤ人口の割合は30パーセント前後であり、これら都市のユダヤ人による商工業支配が強く意識されていた¹⁰⁾。これに対して表1(前号掲載)が示すように、1935年の大都市リーガのユダヤ人口は約11パーセントにすぎない。さらに第三章で述べたように、リーガの歴史において、ラトヴィア人の反感の対象はつねにドイツ人であり、ドイツ人に比べれば、ユダヤ人の影は薄かった。これらの点はさておくとしても、ラトヴィア人の意識において、ポリシェヴィキはただちにユダヤ人なのか。はじめに述べたエゼルガイリスの第2の論点に関連して、検証が必要である。というのも1917年にロシア二月革命が起こったとき、十月革命に先駆け、ラトヴィアでいち早く革命の主導権を握ったのはラトヴィア人ポリシェヴィキだったからである。

以下に、本論と関係するかぎり、ラトヴィアにおいてポリシェヴィキがいかなる存在であったのかをまとめておきたい。

ロシア帝国内の都市としては例外的に、リーガについては1867年以降1913年まで、ほぼ15年間隔で人口構成や経済活動の現状を明らかにする統計資料が残されている。それらを用いたウルリケ・フォン・ヒルシュハウゼンの詳細な研究によれば、バルト海に面する港湾都市リーガは、19世紀後半のロシア帝国で実現された営業の自由化と産業振興政策、鉄道網整備の恩恵を受け、かつての商業都市から工業都市へと変貌する。1864年には、約90の工場で6000人程度の労働者が働いていたのに対し、第一次世界大戦前には、工場数は約400、労働者数は約9万人に増加した¹¹⁾。工業の発展は農村部からリーガへの人口移動を促し、街の人口は、1867年の10万2600人から1913年の50万7500人に増加する。とりわけ1897年に25万5900人であった人口が、1913年まで、わずか16年のあいだに2倍近く増加したのを見れば、リーガの発展がいかに急速であったかがわかる¹²⁾。

また、人口増加によってリーガの人口構成も大きく変わった。すなわち1867年の日常使用言語調査によれば、ドイツ語人口が4万3980人(42.9パーセント)、ラトヴィア語人口が2万4199人(23.6パーセント)であったのに対し、1913年の民族別帰属意識の調査では、ドイツ人が6万8775人(13.6パーセント)、ラトヴィア人が21万30人(41.4パーセント)で、両者の関係は逆転する¹³⁾。リーガは、ドイツ人の街からラトヴィア人の街に変貌した。

しかも、そのさい注目すべきは、農村地帯からリーガに流入したラトヴィア人労働者の教育水準の高さである。1897年のモスクワで、住民の識字率は56パーセントであったのに対し、1913年のリーガは86パーセントに達する¹⁴⁾。これは、義務教育制度がなかったロシア帝国の他の地域と異なり、ラトヴィアでは、啓蒙思想の影響を受けたドイツ人貴族領主や村のプロテスタントの聖職者が学校を開設し、民衆教化に力を注いだ結果であった。この質の高いラトヴィア人労働者の存在が、リーガの工業発展の基盤になったと同時に、ラトヴィアの社会主義労働者運動の基盤ともなった。

リーガでラトヴィア社会民主労働者党が結成されたのは、1904年6月20日、ペテルブルク血の日曜日事件(1905年1月22日、ロシア歴では1月9日)の約半年前である。19世紀末、バルト3県で強行されたロシア化政策は、かえって、それに反発する現地住民の民族意識を活性化させた。そのため1905年革

命は、バルト3県では民族運動と連動しつつ、ロシア本国より激しさをおびた。血の日曜日事件の4日後、リーガでは、それに抗議する労働者や知識人が街頭デモを行い、これに警官や軍隊が発砲して、名が判明しているだけでも64人が死亡、約200人が負傷する大惨事となる¹⁵⁾。この年、6月24/26日の第2回党大会で、ラトヴィア社会民主労働者党の党員は約6000人であった¹⁶⁾。年末にいたって革命が退潮に転じ、ツァーリの懲罰隊がバルト諸県に派遣され、1000人近くが死刑、数千人が流刑に処せられると、党員の数は減少する。しかし、1906年春、ロシア社会民主労働者党に自立した地方組織として加盟し、ラトヴィア社会民主党と改名した党は、それでも1917年まで、ロシア社会民主労働者党のなかで最大の党組織であり続けた¹⁷⁾。

第一次世界大戦の勃発、1917年のロシア革命、1918年11月のドイツの敗北から、1921年1月26日、連合国によってラトヴィア独立が承認されるまで、ラトヴィアをめぐる情勢は錯綜を極める。事態を複雑にしたのはドイツ人の存在であった。第一次世界大戦の勃発後、ドイツ人問題のないリトアニアは、1915年に全土がドイツの占領下におかれると、これに弾みを得て、ロシアからの離脱を求めるリトアニア民族運動は、一気に独立をめざして動き始める。ロシア十月革命後、1917年12月22日にブレスト・リトフスクで始まった講和交渉がもたつくあいだ、1918年2月16日、リトアニアは国内外に独立を宣言し、ドイツの承認を獲得した。戦争終了後、リトアニアに押し寄せた赤軍の脅威に対しては、リトアニアは、はじめは残留ドイツ軍の協力を得つつ、これを撃退した。

これに対して、ドイツ人支配の復活を恐れるラトヴィア人にとって、リトアニアのようなドイツとの協力という選択肢は困難であった。第一次世界大戦中、ラトヴィアでは、クルリャンディア県(ドイツ語ではクールラント)がドイツに占領された後、1915年末、前線はダウガヴァ川左岸で膠着する。しかし、1917年二月革命でツァーリの帝国が崩壊した後、新たに戦争指揮者となったメンシェヴィキの臨時政府は前線を維持できず、1917年9月3日、ついにリーガが陥落した。

二月革命が起こったとき、戦争で打撃を受けたラトヴィア社会民主党の党員は、ラトヴィア全体で約200人、リーガでは60人という有様だったが¹⁸⁾、彼

らは、5月4日から7日までモスクワで開催された第13回党大会で党勢を立て直し、ここで主導権を握ったのがポリシェヴィキである。彼らは、ラトヴィア全土でただちに組織的宣伝活動を開始し、前線で戦うラトヴィア人のライフル部隊をその影響下に取り込んだ。さらに、9月3日のリーガ陥落でメンシェヴィキの権威が失墜し、前線が北へとせり上がるなか、ポリシェヴィキは11月、現在のラトヴィアとエストニアの国境近くに位置するヴァルカでポリシェヴィキ革命を成功させる。この時点で、ライフル部隊をはじめとして、ラトヴィアで展開していた軍隊は、ほぼポリシェヴィキが掌握するところとなった。

ポリシェヴィキによるラトヴィア解放か。それとも、ドイツ軍がこのまま勢力を保って北上し、ラトヴィアでドイツ人の支配が再建されるのか。ラトヴィアのブルジョア自由主義政治家が、明確にラトヴィアの国家的独立に向けて舵を切るのは、1917年末、この二者択一が現実味をおびるにおよんでである。そのさい、当然、期待されたのは連合国側の支持であった。彼らの状況認識によれば、ポリシェヴィキに対するラトヴィアの兵士や民衆の支持は、民衆の反感の的であるドイツ人との戦争が継続しているあいだけと考えられた。そして、そのドイツが敗北したとき、1918年11月18日に臨時政府を組織し、ラトヴィア独立を宣言したのが、農民同盟を率いるカールリス・ウルマニスである。

ところがラトヴィアでは、人心はなお混沌としていた。弱体な臨時政府がバルト地方に押し寄せる赤軍の脅威から身を守るため、連合国が残留を認めたドイツ軍を頼みにせざるをえなかったかぎり、ウルマニスらは、民衆を味方につけることができなかったのである。1919年前半を通じて、臨時政府は情勢をリードする力を持ちえず、ラトヴィアでは、ドイツ人の政治的復権をめざして暴走するドイツ残留軍とラトヴィア人の赤軍とが相対し、それにロシアの白軍まで入り乱れ、戦闘が続くことになる。ウルマニスの政府が、ラトヴィアに先駆け2月半ばにポリシェヴィキを掃討したエストニアの支援を受け、国土から、ドイツ軍も赤軍も白軍も、すべての敵軍を駆逐したのは、ようやく1919年の末だった。

以上の経過を見れば、独立にいたるまで、ラトヴィアとリトアニアの歴史的経験はかなり異なることがわかる。リトアニア人ポリシェヴィキというも

のを知らないリトアニアでは、1940/41年のポリシェヴィキというよそ者による支配が、ポリシェヴィキ支配の受益者と見なされ、また歴史的に反感の対象でもあった非リトアニア人のユダヤ人とリンクされる土壌があったのに対し、ラトヴィアでは、ポリシェヴィキは必ずしもよそ者というのではなかった。もちろん、ドイツ人に対する反感のオルターナティヴとしての民衆のポリシェヴィキ支持には、多くの留保をつけることが必要である。短期間であれ実際にポリシェヴィキ支配が実現した地域では、その恐怖支配に対し、人心は急速に離反した¹⁹⁾。また、第Ⅲ章で述べたように、ラトヴィア独立後に農地改革が断行されると、農民は社会主義革命に対する関心を失った。しかし、ポリシェヴィキの活動家も、状況に応じてそれを支持した兵士も市民も農民もラトヴィア人自身である。1905年革命からラトヴィア独立まで、ユダヤ人という民族集団は、一連の運動の脇役ですらなかった²⁰⁾。1918年9月のモスクワで、チェーカー中央機関のスタッフ781人のうち、ラトヴィア人は約36パーセントを占め、当時のソ連で、チェーカーといえはラトヴィア人だった²¹⁾。

V おわりに —— いま何が問題か

1941年7月のあいだ、ナチ協力者たちの最大の関心は、無保護状態におかれたユダヤ人から、住居であれ金品であれ、盗れるだけのものを盗ることであった。各地区のユダヤ人に、瓦礫の撤去等、街なかでの強制作業を割り振るユダヤ人登録所の役人は、手心と引き替えに賄賂を要求し、ユダヤ人が住むアパートの管理人は、リヴォシュに言わせれば、当時、最も稼いだ者たちだった。ユダヤ人狩りを行うさい、ユダヤ人がどこに住んでいるか、管理人の通報と協力は決定的だったからである。

「[管理人にとって、人の生死を左右しうるような]権力は、日常的に手に入るものではない。それは、一生に一度のチャンスなのだ。このチャンスをつかまないのは、まったくの間抜けにちがいない。そして、実際、間抜けがほとんどいないというのは不思議だ。大きくて金持ちが住むアパートでは、管理人の部屋は積み込まれたものがあふれ出さんばかりで、余った財産は親戚宛に送ら

れた。日がたつごとに管理人は、抜け目なく、精力的かつ大胆になった²²⁾。」

第三章、第四章で明らかにしたように、1941年7月以前のリーガで、反ユダヤ的言動や、ユダヤ人とポリシェヴィキ支配のリンクが存在しなかったわけではない。しかし、『テーヴィヤ』のような事実無根のユダヤ人の犯罪を宣伝する新聞がばらまかれ、白昼ユダヤ人が集団暴行されるのを見るのは、リーガにとって、史上、ほとんどはじめての経験だった。シュタールエッカーが嘆いたように、多くのラトヴィア人の良識は、それについてゆくことができなかった。しかし、彼らは、ナチのユダヤ人迫害に積極的に手を貸す気にはならなかったが、ユダヤ人の保護にかかわる気にもならなかった。多くのラトヴィア人にとって、ユダヤ人迫害は、同胞に降りかかった災いというより、どこか他人事だった。

マイケルソンは、第三章で述べた彼の言語体験に関連させつつ、ユダヤ人とラトヴィア人の関係について、戦後半世紀以上を経て、次のように述懐する。ドイツ語やロシア語を話すユダヤ人には、それぞれドイツ同化主義者やロシア同化主義者がいて、ドイツ人やロシア人の知人や友人を持っていたが、ラトヴィア同化主義者のユダヤ人はいなかったというのである。

「多くのユダヤ人は流暢にラトヴィア語が話せたが、それを家庭で使ったり、自分の母語だと考える者はまれだった。[引用中略]ラトヴィア語を話すユダヤ人がいないということは、ユダヤ人とラトヴィア人のあいだで社会的コンタクトや友情関係が欠如していたということだ。ナチ時代に、一般の人々がユダヤ人に対してほとんどまったく関心を示さず、援護もしなかったことの一因は、間違いなく[両者のあいだに]親密な社会的絆が存在しなかったことにあった²³⁾。」

あるいは、当時16歳のアレクサンダー・ベルクマンは、1941年7月末のリーガを次のように回想している。

ユダヤの星をつけて歩く彼に対し、「通行人は誰も私を殴らなかったし、顔

に唾を吐きかけたり、罵詈雑言を浴びせる者もいなかった。人々は、ただ私をじろじろ見ただけだった。しかし、その顔つきときたら！嘲笑を浮かべ、あからさまにいい気味だと言わんばかりの顔も多かった。しかし、ほとんどの人は、完全に無関心だった。同情的なまなごしは、ごくまれだった。まったく、両側から刑罰の鞭を浴びせられながら歩いているような感じだった。私は、まなごしは相手を傷つけるだけでなく、実際に殺すこともできるのだということを知った。私は、文字通り身体に痛みを感じた²⁴⁾。」

1941年8月、リーガの南のはずれのマスカヴァス郊外区にゲットーの設置が決まると、10月にかけて、住居を剥奪されたユダヤ人のゲットー予定地への移動と、そこにいた非ユダヤ人の他の街区への移動が進む。ユダヤ人は、10月25日を最終期限として、鉄条網で囲まれたゲットーの外に住むことを禁止され、完全に外界から隔離された。もと1万人程度の住民が住んでいたゲットーの敷地に押し込められたユダヤ人は、この時点で推定3万人である²⁵⁾。

以後、ユダヤ人が接触するラトヴィア人は、ゲットーの警備や、ゲットーから街の仕事場へ行き帰りするユダヤ人作業班の見張りにあたる補助警察員や、ユダヤ人から奪った金品のうまみが忘れられず、禁令を犯してゲットーのユダヤ人の住まいにまで盗みに入る窃盗団にかぎられるようになる。リーガの一般市民の眼から、ユダヤ人の姿は消えた。ユダヤ人がどうなったのか、街にグロテスクな噂が流れたのは1941年12月のはじめである。

ドイツの支配地域からユダヤ人を排除することは、戦前、戦中を通じて、ナチのぶれることなき目標であった。1941年9月、独ソ戦が優勢に展開している戦況に鑑み、ヒトラーは、まず大ドイツ国家領域(ドイツ本国、オーストリア、ベーメン・メーレン保護領)のユダヤ人の東方への移送を指示する²⁶⁾。しかし、このとき、移送先となるべき総督府や東部占領地域オストラントは、すでにいるユダヤ人の管理で手一杯で、新たにユダヤ人を受け入れる余裕はなかった。ドイツからユダヤ人を乗せた移送列車が11月半ばに到着予定と通告されたリーガでは、凍てつく冬の到来が間近であったにもかかわらず、彼らを収容できる施設はどこにもなかった。結局、この問題は、11月30日と12月8日の2日間、リーガのゲットーのユダヤ人をルンブラの森で殺害し、彼

らに場所を空けさせることで解決される。このルンブラ・アクションのいっさいを取り仕切ったのが、はじめに述べたイエツケルンである。このとき、ナチの報告書によれば、労働力として約2500人のユダヤ人が残された以外、残りの約2万7800人のユダヤ人が殺害された²⁷⁾。これによってリーガのユダヤ人社会は、ほぼ消滅する。ゲッターに到着したドイツ・ユダヤ人が空き家に入ったとき、そこにはまだ、直前まで住んでいた者たちの生活の臭いと血の臭いが漂っていた。彼らが最初にやらされたのは、体力的にルンブラへの移動に耐えられず、ゲッター内で射殺されたユダヤ人の死体の処理であった²⁸⁾。

リーガの一般市民の反応については、正反対の記述が残されている。ひとつは、戦後ドイツに亡命したフーゴ・ヴィトロックの回想である。バルト・ドイツ人であるヴィトロックは、東部占領地域担当大臣アルフレート・ローゼンベルクに任命され、1941年9月はじめ、民政に移行したリーガで市長職に就いていた。

「1941年も終わりに近づこうとしていたころ、リーガはショッキングな出来事によって暗い影に覆われた。待降節[クリスマスまでの約4週間]の第2日曜日、街に噂が流れた。ユダヤ人が、親衛隊兼警察大将イエツケルンの命令でゲッターから引き出され、リーガから約10キロ離れたところの大きな穴で、全員——男も女も子供も——親衛隊員によって撃ち殺され、そこに埋められたらしいというのだ。噂では、その数、数千人ということだった。やがて、残酷きわまりない噂が真実だったとわかり、犯された犯罪の詳細が知れると、リーガでは、非人間的な行為に対する怒りが広がった。確かに現地の住民は、ポリシェヴィキ占領期にユダヤ人権力者によって拷問され、殺害されるという苦しみを受け——そのことは、写真や物的証拠の展示によって、残酷なる具体性をもってみなに眼に明らかにされたところであるが——しかし、人々は、もっぱら宗教的心情から判断し、無防備の男や女や子供の無慈悲な射殺という神を畏れぬ悪行にぞっとしたのであった。その後まもなくベルリンで、私が大臣[おそらく東部占領地域担当大臣ローゼンベルク]にリーガの住民の怒りを伝えると、大臣は、このおぞましい殺害は、彼の頭越しに上層部から命令され、執行されたのだと答えた²⁹⁾。」

これと、まったく異なるのが、1941年12月23日付けのラトヴィアの親衛隊兼警察指導部の報告書である。

「リーガでは、これまでゲットーに収容されていたユダヤ人の大量射殺のことが広く話題になっている。リーガの住民の大多数は、それに満足し、ユダヤ人を1人残らず除去すること、それによってゲットーが居住地として開放されることを望んでいる³⁰⁾。」

ルンブラ・アクション後、マスカヴァス郊外区のゲットーは、ラトヴィア・ユダヤ人ゲットーとドイツ・ユダヤ人ゲットーに仕切られて存続したが³¹⁾、1943年春から、街の北のはずれのメジャパルクス(ドイツ語ではカイザーヴァルト)で小ゲットーの建設が始まった。1944年7月までに、もとのゲットーのユダヤ人の一部はアウシュヴィッツへ、一部はメジャパルクスのゲットーに移された後、マスカヴァス郊外区のゲットーは解体される。このとき、すでにソ連の赤軍は、東方からラトヴィアに迫りつつあった。小ゲットーに残った不要なユダヤ人の殺害と、労働可能なユダヤ人に対して、東プロイセンのシュトゥットホフの収容所への移送が並行して進められるのは、8月から10月にかけてである。1944年10月13日、リーガは赤軍の手に落ちた。

1941年末にリーガのユダヤ人社会がほぼ消滅した後も、『テーヴィヤ』は反ユダヤ・プロパガンダをたれ流し続けた。パウリス・コヴァリエフスキスの編集で『恐怖の年月』が出版されるのは、1942年後半になってからである。これは、ソ連占領が始まる1940年6月17日から1941年7月1日まで、ユダヤ＝ポリシェヴィキの残虐行為なるものを暴く写真入りのプロパガンダ冊子で、1943年、ドイツ語訳も出版された³²⁾。

しかし、あらゆるプロパガンダの一般市民への影響にもかかわらず、1943年春に創設された武装親衛隊ラトヴィア志願兵軍団の兵士の脳裏にあったのは、ナチのいうユダヤ人問題の最終解決だっただろうか。戦争末期に兵士が絶対的に不足するなか、ドイツ本国で武装親衛隊の隊員集めが強引に行われたのと同様、ラトヴィアで1943年3月から1944年7月まで、16歳から38歳までの男性を対象に行われた志願兵の募兵活動も、形式的には志願を装いながら、実態は強制徴兵に近いものだった。ラトヴィア軍団の中核は、親衛隊第

15武装擲弾兵師団(ラトヴィア第1歩兵師団)と親衛隊第19武装擲弾兵師団(ラトヴィア第2歩兵師団)で、総勢5万2000人である³³⁾。この志願兵でしばしば問題にされるのが、彼らと、1941年7月からルンブラ・アクションまで、ナチのラトヴィア・ユダヤ人迫害の協力者となった者たちとの人的連続性だが、これは、それほど直線的ではない。むしろ例外的に関係が明らかなのが、アライスの保安部隊——アライス・コマンド——である。

1941年7月、撤退するソ連軍の追撃やソ連軍の残兵狩りとラトヴィアの治安回復のため、ドイツ軍によって組織された複数のラトヴィア人の自衛部隊は、8月に入ると、これがラトヴィア人の軍隊として自立することを嫌うナチによって解体される。隊員は、保安警察官(Schutzmannschaften)等に再編された³⁴⁾。これに対して、ラトヴィア各地のユダヤ人の絶滅という特殊任務終了後も解体を免れ、最大時で隊員数1200人という常設部隊に発展したのが、アライス・コマンドである。コマンドは1942年3月、2隊に分けられ、一部はラトヴィア国内でサラスピルスなど、ナチの強制収容所の警備にあたり、また一部はロシアに派遣され、パルチザン掃討作戦やミンスクでのユダヤ人殺害にかかわった。その間、アライスら幹部クラスの隊員は、ドイツのヒュルステンベルクの親衛隊保安局の学校で3ヶ月の訓練を受け、またアライスは、1943年12月31日に第2等鉄十字勲章を授与されている。1944年後半、このコマンドも解体されると、アライスも含め、その一部はラトヴィア志願兵軍団に組み込まれた³⁵⁾。

ナチに協力して着実に昇進したアライスとは、いかなる人物だったのか。ラトヴィア志願兵軍団に残ったコマンドの隊員は、確信的なナチ協力者だったのだろうか。

経歴を見るかぎり、アライスは無定見な人物である。ウルマニス政権下では右翼の学生団体に所属しながら、共産党政権下では、大学でマルクス主義を学び、法律家を志した。その彼が共産主義と決別し、ポリシェヴィキと戦うナチの協力者になった理由のひとつは、アライス裁判における彼自身の弁によれば、1941年6月のラトヴィア人の大量逮捕と、撤退前にソ連当局によって行われた政治犯の虐殺だった。しかし、エゼルガイリスによれば、アライスの近親者で犠牲になった者はいない³⁶⁾。

またルディーテ・ヴィークスネは、1944年から1967年まで、ソ連時代のラトヴィアのKGB(国家保安委員会)で行われたアライス・コマンド隊員356人に対する裁判の記録を用いて、彼らが隊員になった動機を調査している。当時の尋問や裁判の公正さに疑問が残ることを前提としての議論だが、裁判で明らかにされた彼らの動機の多くは、確信的ナチ協力者に期待される思想信条とはかけ離れたものであり、反ユダヤ主義やソ連に対する憎しみといったドラマ性には欠けるものであった。なるほど1941年に隊員となった16人の被告のうち、6人がラジオや『テーヴィヤ』の呼びかけに応じたと答え、9人がアライス本人あるいは知人から勧誘を受けたと答えている。そこには、パールコンクルスツや学生団体での人脈が生きていることが推測され、その反映として、初期の隊員の学校教育のレベルは比較的高かった。しかし、年月が下って隊員になった者は、教育レベルも低く、定職に就いていない者もいた。さらに注目すべきは、彼らが、隊員になった動機として、ドイツに強制労働に送られることや、ラトヴィア志願兵軍団に徴兵され、前線に送られることの回避をあげていることである。彼らにとって、コマンドに入り、ラトヴィア国内でナチの強制収容所の警備にあたることは、ドイツや前線に行くよりはるかにましな選択肢だった³⁷⁾。

ラトヴィア志願兵軍団は、おもにソ連のパルチザン掃討作戦に投入された。そして、ドイツ軍とともに敗走を重ねつつ、1945年4月16日にソ連軍のベルリン攻撃が開始されたとき、首都防衛のため、最後まで絶望的な戦いを続けたのが、親衛隊第15武装擲弾兵師団のラトヴィア人や、デンマーク人、ノルウェー人、フランス人など、武装親衛隊外国人部隊の隊員だった³⁸⁾。彼らは、ナチ協力ゆえに故国に帰ることができなくなった者たちであった。終戦で連合国の捕虜となったラトヴィア人兵士は、約2万5400人である³⁹⁾。他方、ラトヴィア国内で終戦を迎えたラトヴィア志願兵軍団の兵士は、再びソ連の一部となったラトヴィアで行き場を失い、一部は森に逃げ込み、森の兄弟と呼ばれた反ソ・パルチザンとなる。しかし、彼らの戦いも、1956年頃までに残酷に平定された。

連合国側で生き残った元ラトヴィア志願兵軍団の兵士たちは、1945年12月28日、ベルギーのゼーデルヘムの捕虜収容所で「ダウガヴァス・ヴァナギ(ダ

ウガヴァ川の鷹)」という名の組織にまとまる⁴⁰⁾。以後、ダウガヴァス・ヴァナギは、在外ラトヴィア人の強力な反共団体に発展した⁴¹⁾。彼らにとって1991年のラトヴィア独立は、待ちに待った出来事であっただろう。独立前年の1990年から、旧ラトヴィア志願兵軍団の生き残りの兵士やその家族は、彼らによって「ラトヴィア軍団の日」と定められた3月16日にリーガに集り、自由記念碑前で集会を開いている。はじめ、この集会はそれほど注目を集めなかったが、1998年、ラトヴィア政府がこの日を国家的記念日と認定したことにより(2000年に撤回)、それに不快感を示すロシアを巻き込んで、集会は一気に政治化した⁴²⁾。

異国で、他人の首都の防衛のために死んだラトヴィア人兵士の哀れさを思わないわけではない。しかし、この集会に集まる人々が、彼らのナチ協力を、ソ連に対しラトヴィアの独立を勝ち取る戦いのための手段として正当化し、自分たちと死んだ戦友の名誉回復を求めるとき、その歴史認識の一面性は明らかである。

エゼルガイリスが、ラトヴィアにはユダヤ人を殺害しなければならないような歴史的怨念はなかったというのは、本稿の第Ⅲ章、第Ⅳ章で検証したように、まったくの誤りではない。第Ⅱ章で見たように、ラトヴィア人による自己浄化運動は、ナチにとってきわめて迫力に欠けるものだった。ラトヴィア政府は、問題の1998年、大統領直轄で、ラトヴィア大学の研究者のほか、イスラエル、ロシア、アメリカなど国外の研究者と、ラトヴィアのホロコースト生存者も参加した「ラトヴィア歴史家委員会」を発足させ、1940年から1991年まで、ソ連占領時代のラトヴィアで起こった出来事に関する歴史的検証を進めさせた。検証の対象として、ソ連当局によるラトヴィア人迫害の実態の解明とともに、ラトヴィア人のホロコースト関与の解明も重点項目のひとつとされ、後者はまた、ラトヴィアがEU(ヨーロッパ連合)に加盟するために、ぜひともすませてもらわなければならない検証でもあった。はじめに述べたように、筆者はラトヴィア語能力の欠如のため、歴史家委員会によって公開された研究書シリーズのすべてを参照できたわけではない。しかし、1941年7月の初期段階でのラトヴィア人のユダヤ人迫害協力に関して、少なくとも2005年に刊行された第14巻(英語版)にまとめられた研究成果を見るかぎり、リーガに関しては、本稿の第Ⅱ章で述べたこと以上の新事実は見いだせない。

しかし、エゼルガイリスが、1943年に武装親衛隊ラトヴィア志願兵軍団が編制されたとき、すでにラトヴィアのユダヤ人社会は消滅しており、したがって、軍団の使命は純粹にラトヴィアにおけるソ連支配の再来を阻止することであったと言い、3月16日のラトヴィア軍団の日を擁護するとき、そこでは、問われるべき大きな問題が不問に付されている。すなわち、ナチ協力によるラトヴィア解放という彼らのシナリオは、同胞であるラトヴィアのユダヤ人を皆殺しにすることの上に成り立つシナリオだったということである。この事実は、彼らが直接ユダヤ人に手をかけたホロコースト協力者ではなかったことによって免罪されるわけではない。

ユダヤ人が無権利、無保護状態におかれたとたん、手当たり次第に彼らのものを奪った当時のラトヴィア人のモラルの崩壊、ナチ協力者としてユダヤ人に対する暴行や殺害に加わったラトヴィア人の残酷さは、ホロコースト生存者の回想録に見られるように、それまでラトヴィアにおいてそのような事態に免疫のなかったユダヤ人に強烈な印象を残した。クロード・ランズマンのフィルム『ショア』(1985年)で、1942年にトレ布林カの絶滅収容所にいた親衛隊員フランツ・ズーホメルは、貨車に詰め込まれてトレ布林カに到着したユダヤ人を見張るウクライナ人とラトヴィア人を「血に飢えた猟犬」と呼び、最も残酷だったのはラトヴィア人だったと証言している⁴³⁾。

なるほど数の上からいえば、この様な者たちは、ラトヴィア人社会の不良の、さらにその一部だったかもしれない。しかし、積極的なナチ協力者にはならなくても、ラトヴィア人社会全体がユダヤ人の運命に無関心であるという事実、街からユダヤ人が一掃されても、ラトヴィア人にとっては何の支障もなく、ラトヴィア人社会の日常が淡々と存続していくという事実は、当時のユダヤ人の恐怖と絶望を倍加した。この恐怖と絶望感が否認されることに対して、生き残ったユダヤ人には強い反発がある。さらにユダヤ人のなかには、ナチ時代のラトヴィア人による迫害体験をさらなる過去へも投影し、事実反して、ラトヴィアは歴史的に一級の反ユダヤ国家であったと断罪する者もいる。

しかし、ユダヤ人の「過度の」非難に反発するラトヴィア人のホロコースト研究者が、そうした感情的非難は事実無根だと言い、ラトヴィア志願兵軍団

の倫理的潔白性を証明することのみに力をそそいでいるのは、本末転倒である。多くのラトヴィア人が、ラトヴィアの歴史は反ユダヤ主義に対して身に覚えを持たない、というのであれば、むしろ研究は、ラトヴィアにおける反ユダヤ主義の伝統の欠如のもう一つの側面は、ユダヤ人の運命に対する無関心であり、無関心ゆえにいつそう、一般人の歴史認識において、ナチ協力とホロコースト協力が問題として必ずしもリンクされないという、このことの問題性から出発すべきであろう。

- 1) Kaufmann, a.a.O., S. 48.
- 2) Kangeris, a.a.O., S. 171f.
- 3) 第II章の注29)を見よ。
- 4) Einsatzgruppen A, Gesamtbericht bis zum 15. Oktober 1941, op. cit., p. 466.
- 5) *ibid.*, p. 467.
- 6) Jānis Riekstiņš, The 14 June 1941 Deportation in Latvia, in : Nollendorfs and Oberländer (ed.), op. cit., p. 70. 2001年にリーガのラトヴィア占領博物館が発行した小冊子The 14 June 1941 Deportation in Latvia は、1941年6月13/14日の犠牲者数を1万4194人とし、その内訳は、男7077人、女7117人、民族的には、ラトヴィア人1万1418人、ユダヤ人1771人、ロシア人742人、ドイツ人36人、その他227人であったとしている(p. 10)。ただし、小冊子は同ページの注で、最新の研究成果によれば犠牲者数は1万5424人である、と断っている。ナチは、この逮捕と移送を指揮したのはユダヤ=ポリシェヴィキであると宣伝したが、人口比(約4.8パーセント)に比べ、ユダヤ人犠牲者の割合の高さ(12.5パーセント)が着目される。特にシオニズム運動にかかわったユダヤ人は、このとき当局の標的とされた。
- 7) Vgl. Press, a.a.O., S. 33f.
- 8) Alfred Erich Senn, Baltic Battleground, in : Nollendorfs and Oberländer (ed.), op. cit., p. 23f. 特にロシア語ができるユダヤ人は有利であった。

本文で引用した「ラトヴィア人は、ユダヤ人に向かってソ連体制の復讐をしている」というリヴォシュの言葉にも関連するが、ソ連支配下の一般市民がユダヤ人をどう見ていたか、これを知ることにはきわめて難しい。マシュー・コットは、少なくとも史料的には、ユダヤ人をポリシェヴィキやチェキストと同定する言説が、地下の反ソ抵抗組織や巷で広く流布していたと断言することはできないとする。(Matthew Kott, The Portrayal of Soviet Atrocities in the Nazi-controlled Latvian-language Press and the First Wave of Antisemitic Violence in Riga, July-August 1941, in : David Gaunt, Paul A. Levine & Laura Palosuo (ed.), *Collaboration and Resistance During the Holocaust*,

Bern etc. 2004, p. 147f.)

両大戦間期のラトヴィアでは、共産党の活動は弾圧されたため、1940年6月の政変で共産党が唯一の合法政党となったとき、党勢はきわめて弱体だった。1940年12月にリーガで開催された第9回党大会で、第1書記のヤーニス・カルンペールジンシュは、次のように述べている。「合法化後、党はきわめて不満足な状況にあった。党員名簿は存在せず、党委員会は党員の数も構成も知らなかった。中央委員会は、党幹部にも地方組織にも通じていなかった。」(Cit. from Irēne Šneidere, *The Occupation of Latvia in June 1940: A Few Aspects of the Technology of Soviet Aggression*, in : Nollendorfs and Oberländer (ed.), op. cit., p. 48.)

ラトヴィアの社会主義化をめざすソ連にとって、ラトヴィア現地の共産党員だけでは何もできないことは明らかだった。そのため、文書館史料が公開された現在、明らかにされたところによれば、ソ連は、ラトヴィアにとって運命の日となる1940年6月17日より前に、すでにソ連共産党内のラトヴィア人党員をラトヴィアに送り込み、政権転覆に備えさせていた。さらに6月17日には、1919年にロシアに亡命した多数のラトヴィア人共産主義者が³、ソ連の戦車隊とともにラトヴィアに帰国した。ラトヴィアがソ連に組み入れられると、書記カルンペールジンシュが嘆く党勢を補強するため、ラトヴィア国外から党員が送り込まれたが³、その多くはロシア人であった。(ibid., p. 50f.)

- 9) Rivosch, op. cit., p. 38.
- 10) 野村, 前掲「自国史の検証」149ページ以下を参照。
- 11) Hirschhausen, a.a.O., S. 51f.
- 12) Ebd., S. 57.
- 13) Ebd., S. 57, 58 u. 61. 第Ⅲ章の注53) も見よ。
- 14) Ebd., S. 50.
- 15) The Museum and Documentation Center of the Latvian Society of Jewish Culture, *Fragments of the Jewish History of Riga*, Riga 1991, p. 15. 64人のうちに5人のユダヤ人が³含まれていた。
- 16) Jürgen von Hehn, *Die Entstehung der Staaten Lettland und Estland. Der Bolschewismus und die Großmächte*, in : *Forschungen zur Osteuropäischen Geschichte*, Bd. 4, Berlin 1956, S. 106.
- 17) Ezergailis, *The 1917 Revolution in Latvia*, p. 7.
- 18) Hehn, a.a.O., S. 116.
- 19) Ebd., S. 131.
- 20) ただし1905年革命には、ラトヴィア社会民主労働者党と連帯して、社会主義ユダヤ人労働者の党であるブンド(「リトアニア・ポーランド・ロシア全ユダヤ人労働者同盟」の略称)も積極的にかかわった。ブンドは、シオニズムに反対し、現在の居住国でのユダヤ人の政治的、民族的同権の獲得をめざす立場をとる。ただし、ラトヴィ

アの独立前から両大戦間期を通じて、ブンドが最も影響力を持ったのは、リトアニアに接するラトガレ地方である。

- 21) Irēne Šneidere, *The First Soviet Occupation Period in Latvia 1940-1941*, in : Nollendorfs and Oberländer (ed.), op. cit., p. 305, note 40.
- 22) Rivosh, op. cit., p. 29. Vgl. Press, a.a.O., S. 47. Cf. Kacel, op. cit., p. 7.
- 23) Michelson, op. cit., p. 19.
- 24) Bergmann, a.a.O., S. 30. 7月24日、リーガのユダヤ人は、識別のため、右胸に黄色のユダヤの星をつけることを義務づけられた。さらに、ラトヴィアの民政への移行に先立ち、8月はじめに検討されていた「帝国全権占領区オストラントのユダヤ人の取り扱いに関する暫定的指針」では、星は、左胸と背中につけることとされた。(シュタールエッカーの1941年8月6日付けの草稿 *Betrifft: Entwurf über die Aufstellung vorläufiger Richtlinien für die Behandlung der Juden im Gebiet des Reichskommissariates Ostland*, Latvia State Historical Archiv, Riga (以下LVVAと略記する), Fond P 1026, Bl. 296fを参照。)ただし、指針通り、背中にも星をつけるよう指示が出るのは、リーガが正式に軍政から民政に移行した9月1日である。ベルクマンは、7月の末、胸と背中にユダヤの星をつけて外出したとしているが、記憶違いであると思われる。
- 25) *Tēvija*, numurs 86, 8. 10. 1941, p. 3. Angrick u. Klein, a.a.O., S. 127. 独ソ戦直前のリーガのユダヤ人口は、ドイツからのユダヤ人避難民の受け入れや、ソ連支配時代の地方のユダヤ人の移住により、1935年当時より増加していたと推定されるが、単純に1935年と比較しても、すでにこの時点で1万人以上のユダヤ人が姿を消したことになる。
- 26) ユダヤ人の排除が、さしあたり東方への追放という方法で進められたことは、現在、ホロコースト研究者の一致した見解である。
- 27) *Berichtsfragment des EK 2*, LVVA, Fond P 1026, Bl. 262-264. Vgl. auch Angrick u. Klein, a.a.O., S. 282. 同じEK 2の報告によれば、1941年12月から翌年にかけて、短い間隔をおきながら、大ドイツ国家領域より約1万9000人のユダヤ人がリーガに移送された。Vgl. auch Angrick u. Klein, a.a.O., S. 212f.
- 28) 11月30日のアクション後のゲットオの惨状については、Frida Michelson, *I survived Rumbuli*, translated from the Russian and edited by Wolf Goodmann, New York 1979, p. 77f.を見よ。
- 29) Hugo Wittrock, *Erinnerungen*, Lüneburg 1979, S. 37f. 1873年生まれのヴィトロックは、1908年、リーガで保険会社を設立するが、第一次世界大戦中、ドイツのラトヴィア占領に協力したため、戦後ドイツに亡命、1925年になってリーガにもどった。しかし、ウルマニスの独裁体制が成立すると、1936年、再びドイツに移住、その後、1941年、ローゼンベルクの要請を受けてリーガの市長職に就いた。敗戦でドイツに亡命し、1958年、リュエベックで死亡している。1979年に出版された*Erinnerungen*は、もともと出版を予定せず、戦後1950年までに子供と孫のために書き残された手稿Ein

bewegtes Leben. Erinnerungen eines Deutschbalten の一部である。

- 30) Der SS und Polizeiführer Lettland, Kommandeur der Ordnungspolizei, Bericht vom 23. Dezember 1941, LVVA, Fond P 70-5-44, Bl. 29.
- 31) 1942年2月当時、ラトヴィア・ユダヤ人ゲットーには、リトアニア・ユダヤ人を含めて少なくとも4717人(男4193人、女524人)がおり、ドイツ・ユダヤ人ゲットーには、あくまでも一つの推定として約1万2400人がいた。Angrick u. Klein, a.a.O., S. 237 u. 245.
- 32) 第IV章で述べたように、独ソ戦以前のソ連支配下のリーガでは、一般市民のあいだで、ユダヤ=ポリシェヴィキに対する報復の必要が確信されていたとは言い難い。これに対して、第IV章の注8)のコットが着目するのが、ナチ支配下で行われた反ユダヤ・プロパガンダの長期的影響である。コットによれば、コヴァリエフスキスの『恐怖の年月』の記述は、いまま年配のラトヴィア人の記憶に真実として刻み込まれているという。(Kott, op. cit., p. 157.)戦後、ソ連が、西側に亡命したラトヴィア人をナチのホロコースト協力者として断罪したのに対し、亡命ラトヴィア人の側では、ユダヤ=ポリシェヴィキの残虐行為に対する報復が、彼らのナチ協力を正当化するための対抗言説として使用された。
- 33) Andrew Ezergailis, *Nazi/Soviet Disinformation about the Holocaust in Nazi-Occupied Latvia*, Riga 2005, p. 57.
- 34) 第II章で引用した1941年7月7日付けの「事報ソ連」第15号および第II章の注47)を見よ。バルト3国で創設されSchutzmannschaftenにおわされた多様な対独協力任務については、Richard Breitman, *Himmler's Police Auxiliaries in the Occupied Soviet Territories*, in : Simon Wiesenthal Center Annual, Vol. 7, 1990, p. 22-39を見よ。
- ここで、ナチとペールコンクルスツのその後の関係について述べておきたい。ナチがリトアニアのLAFや東ガリツィアのOUNの独立要求を認めず、両組織を解体したのと同様、「ラトヴィア人のためのラトヴィア」を唱えるペールコンクルスツもまた、1941年8月17日、ナチによって解体される。その後、団員の多くは保安警察等に吸収されることによってナチ協力者に留まり、一部は、ラトヴィアの再独立をめざして反ソ・反独の地下抵抗組織に身を転じた。ツェルミンシュは、1941年7月中旬、旧ウルマニス政権の閣僚の1人であったアルフレーツ・ヴァルドマニスを中心とするラトヴィア国家再興の試みにヴェイス(「事報ソ連」第15号を見よ)らとともに加わり(Angrick u. Klein, a.a.O., S. 104f.)、試みが挫折した後、対独協力者にとどまりつつ、地下のラトヴィア独立運動にもかかわった。しかし、後者の活動のため、1944年にナチによって逮捕され、ドイツのプロッセンビュルクの強制収容所で、いわゆる特別待遇の囚人(Ehrenhaft)となった。1945年の終戦で解放され、1949年にアメリカに移住した。
- 35) Vīksne, op. cit., p. 355f. Ezergailis, *The Holocaust in Latvia*, p. 173f.
- 36) Ezergailis, *The Holocaust in Latvia*, p. 178.

- 37) Vīksne, op. cit., p. 358f.
- 38) 芝健介『武装SS』, 講談社, 1995年, 238ページ。
- 39) Ezergailis, *Nazi/Soviet Disinformation about the Holocaust*, p. 63.
- 40) *ibid.*, p. xvi.
- 41) この団体の活動に対するソ連の対抗プロパガンダ冊子カエ. Avotinš, J. Dzirkalis, V. Pētersons, (pseud.), *Kas ir DAUGAVAS VANAGI, Rīga 1962* (英訳はDAUGAVAS VANAGI, *Who are they?*, Riga 1963)である。
- 42) ダウガヴァス・ヴァナギは, 親衛隊第15武装擲弾兵師団(ラトヴィア第1歩兵師団)と親衛隊第19武装擲弾兵師団(ラトヴィア第2歩兵師団)が1944年にはじめて合同で戦った3月16日を「ラトヴィア軍団の日」と定めた。

集会が政治化する背景には, 第二次世界大戦後, ロシアからラトヴィアに移住したロシア人の処遇をめぐるロシアとラトヴィアの対立がある。ソ連時代のラトヴィア人のシベリア追放とロシア人のラトヴィアへの移住によって, 独立直前の1989年で, ラトヴィアの人口約266万7000人のうち, ロシア人が34パーセントを占め(ラトヴィア人は52パーセント), 特にラトヴィアの人口の34.2パーセントが集中する首都リーガでは, ラトヴィア人の割合は36.5パーセントでしかないという有様だった。そして, ラトヴィア人がロシア語の習得を余儀なくされたのに対し, ラトヴィアのロシア人のうち, ラトヴィア語が話せる者は21パーセントにとどまり, 自国の首都でラトヴィア語が通じなかった。(Plakans, op. cit., p. 184,189.)そのため, 独立後のラトヴィア政府は, これらラトヴィアのロシア人住民に対する市民権や国籍付与に関して, 当初, きわめて制限的な姿勢で臨んだ。
- 43) クロード・ランズマン, 高橋武智訳『ショアー』(作品社, 1995年)の244ページでは, ラトヴィア人をリトアニア人と誤訳している。ホロコースト生存者の回想録を見ると, ラトヴィア人, ウクライナ人, エストニア人, リトアニア人等のナチ協力者, また「アスカリ」と呼ばれたソ連軍からの脱走兵あるいは捕虜でナチ協力者となった者たちは, 時として収容所のユダヤ人に買取されるいい加減さと, 場合によっては異常なまでの凶暴さとを併せ持っていた。なお, アスカリとは, アラビア語で兵士を意味し, 一般には, 東アフリカ等の植民地で植民地支配に協力した現地人兵士に対して使われる語である。

付記: 本稿は, 科学研究費補助金基盤研究(B)による研究「国家社会主義からの離脱・進化の多様性: 市場経済化の国際戦略・制御能力の比較研究」の研究成果の一部である。



写真1 ビチエルニエキの森
2004年、筆者撮影



写真2 ビチエルニエキの森の記念碑
2004年、筆者撮影



写真3 1941年7月4日に放火されたゴーゴリヤ通りの大コーラル・シナゴーク跡
2004年、筆者撮影



写真4 大コーラル・シナゴーク跡の記念碑
2004年、筆者撮影



写真5 マスカヴァス郊外区の旧ゲットー跡。当時の建物のいくつかは現在も使用されている。
2004年、筆者撮影



写真6 ルンブラの森の記念碑
2004年、筆者撮影



写真7 ルンブラの森の記念碑。「現地のナチ協力者」という文言を入れることに対し、反対の声もあがったという。

2004年、筆者撮影